

石田 和也さん (陶芸 / 岡山県備前市)



【経歴】(2025年4月現在)

- 2006年 備前陶芸センター 卒業
- 2007年 京都府立陶工高等技術専門学校 卒業
備前焼人間国宝伊勢崎淳に師事[~2010]
- 2011年 渡英Lisa Hammond工房等で研鑽を積む
- 2015年 オックスフォード大学客員教授となる
- 2020年 備前市で採掘した陶石での作品
—備前磁器—に取り組む
- 2022年 個展(天満屋岡山店)
「石田和也展—螺—備前焼」を開催
オーストラリアに3か月滞在し制作、穴窯焼成の指導、備前焼の宣伝活動を行う
(以後もインドネシア、インド等で制作・指導)
- 2023年 益子陶芸美術館にて滞在制作
- 2024年 個展(岡山県天神山文化プラザ)
「石田和也展—備前磁器の世界—」を開催

【受賞歴ほか】

- 2010年 国民文化祭美術展 奨励賞
- 2015年 日本伝統工芸展中国支部展 教育長賞
- 2019年 岡山アワード 作家・クリエイター賞

石田和也氏は、千年の伝統を持つ備前焼の中であって、新進気鋭の作家として注目されている。備前焼は、近代に至って金重陶陽が登場し、桃山茶陶の復興がなされ、オブジェ陶器、施釉陶器の新生面が開かれ、今日では多様な素材、技法、表現を擁する窯場となっている。

同氏が2024年秋に岡山県天神山文化プラザで開催した「石田和也展—備前磁器の世界—」では、従来の備前焼の範疇を超えた創造の世界を示した。併せて、近年の海外における穴窯の造営やワークショップにより、備前焼を知り、作る喜びを発信して実演している。

これまで、色のついた泥を用いて模様をつけるイギリスの伝統的な技法「スリップウェア」や、ろくろの遠心力を利用し捻れを生かしたオリジナル技法「螺法(らほう)」を得意としてきたが、近年は貝や地層、氷河や鍾乳石など自然の造形美からインスピレーションを得て、素材の特質を引き出す備前焼の伝統的な精神と、薪窯で起きる変化や自然釉を融合させながら創作している。

さらに、2020年からは、蛸石産地として知られる備前市の土橋鉾山で蛸石や陶石を採掘して、「自分は、この太古から眠る素材をどのような表現に変えられるか」に挑戦し、この成果を先の天神山文化プラザの個展で披露した。「White abyss(白い深淵)」と題したこの企画で、「備前磁器壺」《Orijin》《Midnight Orb》《Ripple》等により、宇宙や地球の原初を想起させる荒々しくも神秘的な「備前磁器」をダイナミックに造形して示した。

同氏の作品は、伝統と現代の表現力を融合させたもので、国内外で高く評価されており、備前焼に留まらず、現代陶芸の新たな世界を創造しつつある旗手として、今後、益々の活躍が期待できる。

受賞の言葉

私は備前焼の里、備前市伊部に生まれ、父が備前焼作家であったこともあり、幼い頃から土と炎に親しんでまいりました。高校生の時、初めて自作の湯呑みを友人に贈った際、大変喜んでくれたことが、私の陶芸家としての原点です。人間国宝の伊勢崎淳先生に師事したことで、備前焼の本質を深く理解することができました。また、その後のイギリスでの経験は、伝統と革新の融合という新たな視点を与えてくれました。これらの経験を糧に、伝統的な技法を継承しつつ、現代の感性に響く作品づくりに挑戦しております。

近年、備前焼を取り巻く環境は決して楽観視できるものではありません。しかし、私はこれまで培ってきた経験を活かし、国内外へ自分なりの備前焼の魅力を発信することで、その普及に貢献し、次世代を担う後継者の育成にも力を注ぎ、備前焼の未来を切り拓いていきたいと強く願っております。

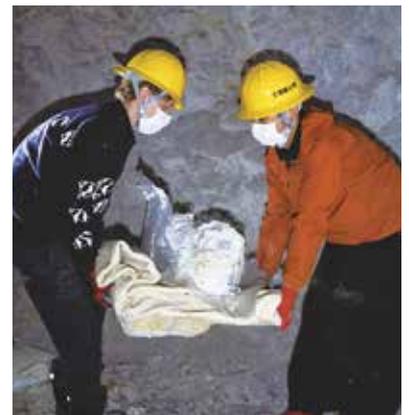
この度は、身に余る輝かしい賞を頂戴し、誠にありがとうございます。心より感謝申し上げます。今後も、備前焼の伝統を継承し、新たな可能性を追求することで、皆さまのご期待に応えられるよう精進してまいります。



ろくろ作業



展覧会用作品である球体作品の制作



備前市土橋鉾山での粘土採掘